

Spirit 02

現在

小笠原に暮らすということ

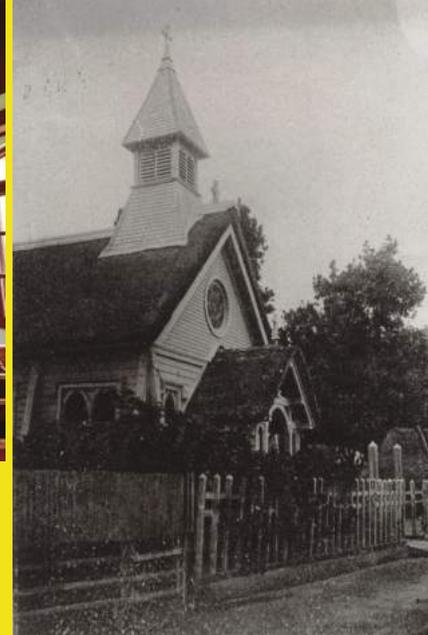
小笠原が歴史の舞台に登場してから現在に至るまで、複雑かつ数奇な歴史を歩んできた小笠原諸島。現在も島にはさまざまな立場や職業の島民が在住している。本章では、いまを力強く生きる島民たちや小笠原に関わりの深い人々を取材。インタビューを通して小笠原の「現在」を浮き彫りにする。

- P038 CASE01 : 歴史や暮らしについて聞く(欧米系島民)
- P042 CASE02 : 歴史や暮らしについて聞く(旧島民)
- P046 CASE03 : 歴史や暮らしについて聞く(旧硫黄島島民)
- P050 CASE04 : 戦争について聞く
- P054 CASE05 : 移住や暮らしについて聞く(新島民)
- P058 CASE06 : 農業について聞く
- P062 CASE07 : 漁業について聞く
- P066 CASE08 : 観光業について聞く
- P070 CASE09 : 交通・インフラについて聞く
- P072 CASE10 : 医療事情や健康について聞く
- P074 CASE11 : 自然保護について聞く
- P076 CASE12 : 伝統文化について聞く

「“欧米系”“旧島民”ではなく
“小笠原島民”として
皆が汗を流し頑張れる島に」



1909（明治42）年に建てられた歴史ある教会。太平洋戦争の戦火にて一度焼失したものの、米国海軍や米国聖公会、さらに欧米系島民の手によって再建された。



戦前は自然の恵みが豊かでとても住みやすい島だった

かつて欧米列強による捕鯨船の基地として重宝された小笠原諸島。資料によると1830（文政13）年に欧米系の人々が父島に定住を始めたと伝えられているが、小笠原愛作さんの先祖が島に上陸したのもまさに同時期だった。

「先祖のゴンザレスはポルトガル領の出身で、イギリス船の乗組員として島に訪れたと聞いています。私はその5代目になります」（小笠原さん・以降同）

18世紀当時は、クジラから採れる油を求め、欧米各国がしのぎを削っていた。絶好の漁場だった小笠原近海にも多くの捕鯨船が訪れたという。小笠原さんら欧米系島民の多くはその子孫である。

現在、小笠原さんは、父島の目抜き通りにある教会で牧師を務める。緑の芝と青い空に白亜の洋風建築が周囲の景色によくマッチしている。戦前には100人以上の欧米系や太平洋諸島系などの島民

が父島で暮らしていた。大多数がキリスト教を信仰していたため、礼拝はもちろん、彼らの拠り所として1895（明治28）年最初の教会が創設されたが、1909（明治42）年に改築され名称も「聖ジョージ教会」と変わり現在の教会へとつながっている。

「実はこの建物は2代目。以前の建物は戦災により焼失してしまいました。祖父も戦前、この場所で牧師をやっていたのです」

早くに父を亡くした小笠原さんは祖父母のもと、小学5年のはじめまで父島で育てられた。すでに日本が戦争の道へと突き進み始めていた時代である。

「当時はまだ捕鯨が盛んで、多い日には1日に2頭、3頭とキャッチャーボートがクジラを引っ張って陸揚げしていましたね。子供心に解体作業を興味津々で眺めていたのを覚えています。魚も豊富だ

小笠原愛作（おがさわらあいさく）さん

1931（昭和6）年父島生まれ。先祖はポルトガル領出身のゴンザレス氏で、愛作さんはその5代目。小笠原聖ジョージ教会の牧師として、欧米系はもちろん島民の心の拠り所となっている。

し、野菜も内地へ出荷できるほどよく実っていた。島全体が豊かだったんですよ」と目を細める。

その頃には内地からの移住者も増えており、欧米系島民はすでに少数派となっていたが、それでも不自由を感じることはあまりなかったという。「子ども同士、たまにからかわれることはありましたが、自分自身あまり欧米系だと意識することもなかったですね」

祖父は朝食にパンを好んで食べていたというが、自宅の食事はおおむねご飯や味噌汁、魚などの和食が主流。ハレの日に鶏や豚肉を食していたそうだ。そんな平和な島の生活に戦争の足音が聞こえ始める。次第に内地から派遣される将兵が増え、ついには教会や自宅が軍に接収された。将兵の数は2万人に上ったという。そして戦況は悪化の一途をたどっていく。

「マストや煙突が折れた状態などで入港してくる軍艦を見て、子どもながら『何かおかしいぞ』と感じていました」

そんな小笠原さんに転機が訪れたのが1943（昭和18）年6月。祖父が亡くなったため、東京都内の親類を頼り、島を離れたのだ。

「全島避難が行われる約1年前ですね。東京・碑文谷にある親類の家に身を寄せたのですが、東京も次第に空襲がひどくなり、岩手県へ疎開することとなりました」

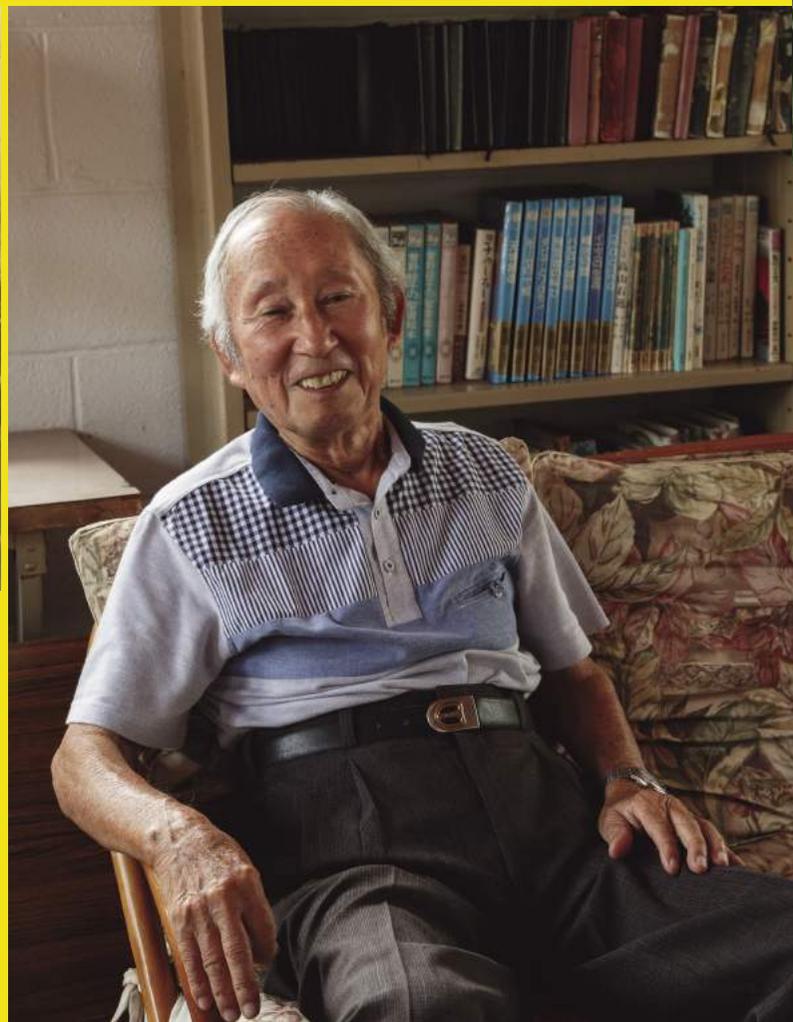
疎開先、そして終戦後の内地での暮らしは、欧米系島民の人たちにとって、非常に辛いものであった。その容姿のため、戦時中は敵性国民だと

まるで欧米にいるかのよう
に思わせる美しい佇まい。
島の観光スポットとして
も人気が高い。



愛作さんが見せてくれた一枚の写真には、35歳という若さで早世した父親に抱かれる幼い愛作さんが写っていた。

戦前の島の様子を愛おしそうに語る愛作さん。「父島」「母島」など家族の名前が付けられている小笠原諸島のネーミングが実にいいと笑う。





返還前、ラドフォード提督学校での日本語の授業風景

疑われたり、揶揄されたりすることもしばしば。また戦後の食糧不足の時代においても、なかなか商品を買ってもらえなかったりと苦難が続いた。「欧米系の島民たちは、早く島に帰りたいと皆願っていたと思います」

その願いは意外な形でかなうこととなった。1946（昭和21）年10月、欧米系島民にのみ父島への帰島が許されたのだ。だが米軍占領下の父島の情報は皆無。帰っても一体どうやって生計を立てていけばよいのかも不透明だった。それでも多くの欧米系島民が帰島の道を選んだ中、小笠原さ

んは内地での進学を決意する。

「帰りたいという気持ちはもちろんありました。ただ、きちんと神学を学んで父島の教会を再興したいという思いが日増しに強くなったのです」

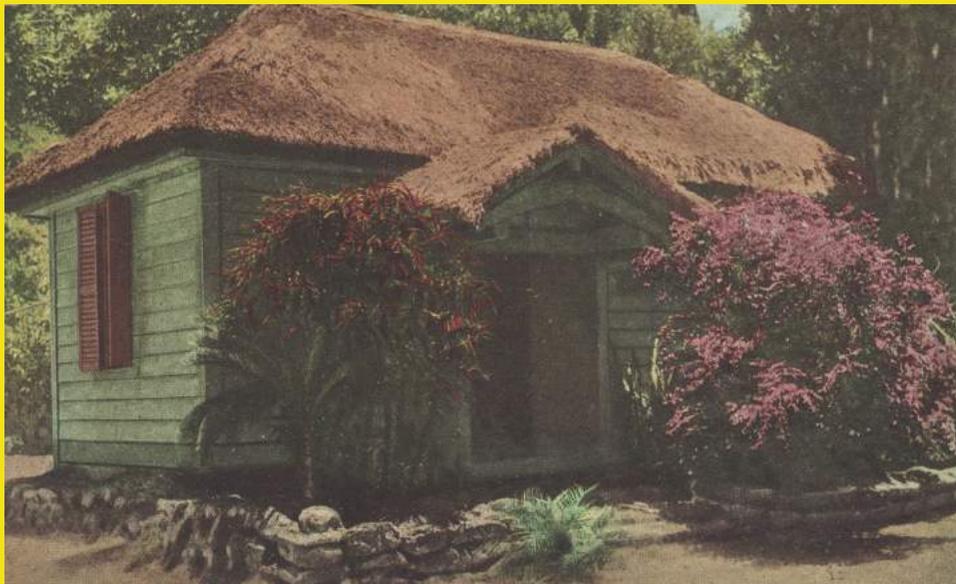
結局、小笠原さんが帰島したのは1962（昭和37）年のこと。小学生で島を離れてからすでに19年もの月日が流れていた。

「上陸して驚いたのは、幼い頃の記憶とまるで違った景色になっていた点でした。建物もかまぼこ形の宿舎や病院などの施設以外ほとんどなく、まさに米軍の基地という様相で、その周りを囲むように欧米系島民たちが暮らしていた」という。

帰島した欧米系の島民たちは、米軍施設従業員としての給料や漁業で生計を立てていた。そして彼らの子どもたちは、米軍将兵の子息たちが通うラドフォード提督学校と一緒に通っていた。星条旗のもと英語でアメリカの歴史を学び、身も心もアメリカ人になろうとしていたのだ。

「だから返還が決まった時は、『僕はアメリカ人だ』『日本人になりたくない』と主張する子どもたちがほとんどだった気がします」

それでも「返還後は次第に新島民と呼ばれる移住者が増え、返還から50年が経とうとしている現在、島民の多くを占めるようになりました。もはや『欧米系』だの『旧島民』だの言っている時代じゃない。小笠原島民として結束し、新しい島づくりを行っていくべき」だと小笠原さんは前を向く。そのまなざしは歩むべき未来をしっかりと見据えているようだった。



戦前の父島に建てられていた欧米系島民の住宅

「いまでも母島が大好き。 豊かな島で何より人情があった」

明治初頭に小笠原諸島の領有を各国に通達した日本政府は、以降、開拓のため島への移民を積極的に奨励した。開拓民の出身地は、地理的に小笠原諸島に近い八丈島や青ヶ島が多かったという。現在、父島で暮らす吉田チャさんもその子孫の一人である。

「もともと父方の祖父は青ヶ島で大工を生業としていました。その父がとある事情で祖父に勤当されたことをきっかけに島を出て母島に行き着いたと聞いています」

チャさんの父親は1896 (明治29) 年生まれ。当時母島には青ヶ島出身の人がかなりいたそうだ。島には「若い衆組合」という、トンネルを掘ったり、南鳥島に行って飛行場を造ったり、夏になればカ

ツオ漁に出たりする、「何でも屋」のような集団の一員として働いていた。そんな中、地元・母島出身の母と結婚して生まれたのがチャさんだった。

昭和初期の母島では、沖村だけで約1500人・250世帯の島民が暮らしていた。現在の母島の人口の約3倍というから驚きである。

「1928 (昭和3) 年、母島に尚美園という幼稚園ができたのですが、私はその1期生でした。父島にも幼稚園がなかった時代にですよ」

幼稚園には先生が1人、お手伝いの女性が2人いて、子どもたちの面倒を見てくれた。

「お手伝いのお姉さんが、毎朝、近くの井戸で水をくんでくれるんです。その水をいただいとうがいをするのが日課だったのを覚えています」

吉田チャ (よしだちや) さん

1923 (大正12) 年母島生まれ。父親は青ヶ島出身、母親は母島出身。15歳まで母島で暮らすもその後、就職のため横須賀へ。1942 (昭和17) 年に父島で結婚するも、その後疎開。返還後はいち早く父島への帰島を果たした。



**母島に初めてできた幼稚園の
第1期生だったんです**





上／戦前の母島・沖港。のどかな景色が広がっていた。下／昭和天皇が母島の沖村小学校に行幸したときの様子。左／近所を散策するのが目下の楽しみだという。



1928（昭和3）年、母島・尚美園の入園式の写真。○で囲んだ女の子が当時の吉田さん。

島民たちが暮らしていた家屋はおもに木造平屋建て。屋根は瓦ではなくシュロの葉で葺いていたが、部屋には畳が敷かれ、土間に炊事場があるなど、内地の家屋と大差がなかったようだ。また風呂も各家庭に備わっていたが、共同風呂を利用することが多かったという。

「井戸の近くには、たいてい大きな木桶の風呂があるんです。友達とよく一緒に入っていました」と当時を懐かしむ。また7人きょうだいの長女だったチヤさんは、放課後、弟妹の子守をすることも多かった。

「お駄賃がわりにもらえる1銭で、大きな飴玉が2つ買えたんですよ」

通りにもっと色とりどりの花々を植えてほしい

このように当時の母島の生活は豊かだったようだ。実は母島だけでなく父島も同じく豊かな島だったと、CASE 01に登場する小笠原愛作さんも証言している。

大正から昭和初期にかけては、まさに小笠原諸島の黄金期といえる時代だったが、そんな状況を一変させたのが戦争だった。15歳になったチャヤさんは母島を離れ、横須賀の海軍建築部へと就職。海軍で邦文タイピストとして働き始めた。さらに1940(昭和15)年、当時17歳だった彼女はトラック島へ赴任する。まさに日本が戦争への道を進んでいった時代のことである。「トラック島で1年ほど軍隊生活をしました。宿舎は大部屋で、10人ほどで共同生活を行っていました。夜は消灯ラッパが鳴るんですが、見回りが去ったのを確認してから、皆でこっそりと話などをしていましたのを覚えています」

その後はいったん、横須賀へ戻るものの、縁談のため父親から小笠原へ呼び戻される。結婚は母島に在住していた母親と相談してからと決めていたが、父島で待ちかまえていた父親の説得に折れ、そのまま結婚する。戦時中である1942(昭和17)年、チャヤさんが19歳の時のことだった。

「神前で式を挙げたのですが、私たちが大神山神社での挙式第1号だったんですよ」と笑う。

子どもの頃、夏休みなどを利用して父島には何度も遊びに来ていたが、当時の父島は、母島に比べて店も多く開けた印象で「東京のよう」に思えたそうだ。そんな父島で新婚生活を始めたが、それも長くは続かなかった。戦局の悪化に伴い、父島からの疎開が始まったのだ。8カ月の子供がいたチャヤさんは、1944(昭和19)年3月に、最初の疎開便で八丈島へ向かった。「前日に支庁からの引き揚げ命令が出たので大慌てで準備しました。芝園丸で引き上げたのですが、ちょうど父島でチフス患者が出たため、八丈島に着いてからも10日間ほど隔離状態だったのを記憶しています」

そこから終戦までは多くの旧島民同様、親類や

知り合いを訪ね、疎開先を求めて内地を転々とする日々を送る。チャヤさんは八丈島に数カ月いた後、さらに横須賀、四日市へと疎開。四日市で終戦を迎えたそうだ。その後、埼玉に引っ越して夫婦で占領軍相手の理髪店を開いたが、「日増しに島に帰りたいという思いが強くなっていった」

返還後、いち早く父島へ帰島したチャヤさん夫婦。疎開から小笠原が返還されるまでの約四半世紀、旧島民の方々がどんな思いで帰島を待ち望んでいたのかは想像に難くない。なお、母島への本格的な帰島は父島よりさらに遅れたが、その後チャヤさんは故郷である母島に戻ることはなく、父島で暮らし続けて今日に至る。

「現在では定期船も就航し、内地の人も気軽に来島できるようになりました。父島もそうですが、母島も新島民の方が増え、昔なじみの人はほとんどいないんです」と寂しさをのぞかせる。が、それでも「故郷である母島が大好き」だとチャヤさんは胸を張る。

現在チャヤさんは95歳。子どもとよく近所を散策するという彼女の目下の願いは、島にもっと花を植えてほしいことだそうだ。

戦前の母島・元橋より海岸方面を望む。

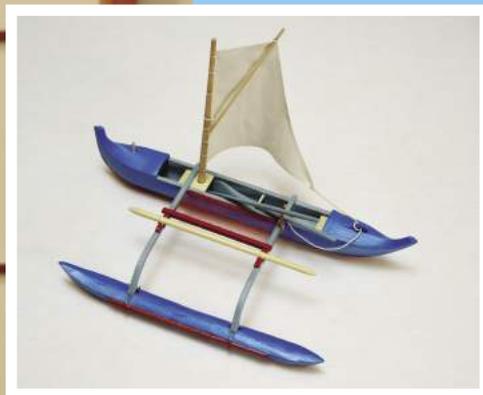


「硫黄島の記憶を
絶やすことなく
次の世代に伝えたい」

山下賢二 (やましたけんじ) さん

1930 (昭和5) 年硫黄島生まれ。満14歳の時に強制疎開により島を離れ栃木県へ疎開。第1回墓参団に参加して以降、数度にわたり訪島。全国硫黄島島民の会名誉会長。





硫黄島での漁で使われていたカヌーを再現した手作りの模型。実際は全長8mほどあったという。

現在の硫黄島。奥にそびえるのが摺鉢山。山の形が変わるほど米軍の砲撃はすさまじいものだったと言われている。



戦前には1000人を超える人々が暮らしていたという硫黄島。小笠原の施政権返還からはや半世紀が過ぎようとしているにもかかわらず、いまだ硫黄島民たちの帰島がかなっていない。

「温暖な気候と土壌のおかげでしょう。カボチャやサツマイモをはじめ、農作物は豊富だったし、魚もよく獲れました。本当に自然の恵み豊かな島だったんです」と当時を懐かしむのは、全国硫黄島島民の会の元会長である山下賢二さんだ。

山下さんは1944(昭和19)年、強制疎開で島を離れるまでの15年間に硫黄島で暮らした。当時、島には大小7つの集落があり、そのうちの南集落出身。

「南集落には18軒ほどの世帯があったと思います。島に尋常小学校は一つのみだったのですが、正月になると子どもたちで障子ほどの大きさがあるためとも為朝風

を揚げ、よく遊んだものです」

硫黄島への本格的な開拓が始まったのが明治30年代。群馬県の出身だった山下さんの祖父もその頃に入植したという。

「まず祖母の故郷である青ヶ島へ行き、その後、しばらく八丈島で暮らしてから、硫黄島へ渡ったそうです。島の人々は基本的に半農半漁。当初はパイナップルなどの果物やサトウキビなどを栽培していたのですが、国の要請などもありココアの栽培が次第に増えていきました。漁はカヌーを使ってムロアジやトビウオを獲っていました」

ゆえに食べ物に困ることはなかったそうだが、雨量が少なく乾燥した気候のため水の確保には苦労した。各家庭で100トンほど入る地下タンクを数基所有し、雨水をためて大切に使っていた。

「ため水だからどうしてもボウフラが湧いてしまう。

その予防としてタンクにはメダカ(の一種)を放していたんです。また同時にメダカは水質のチェックにも役立ちました。メダカが死んでいれば、その水を飲むと危険ということですから」

そんな硫黄島で海軍の飛行場が着工されたのが1932(昭和7)年のこと。その後も飛行場の増設や砲台の整備が行われていった。それでも島民の生活はさほど変わらなかったそうだ。その後、太平洋戦争が始まり戦局が悪化していくと、軍は硫黄島の要塞化を決断。続々と軍隊が島へ入ってきた。「1944(昭和19)年の1月だったでしょうか。一挙に数千人規模の兵隊が入ってきました。自分の家の敷地内にも一個中隊が駐屯しました」

そして山下さんがいまでも忘れることができないという初空襲の日がやってくる。

「ちょうど小学校を卒業して軍で電話ケーブルの敷設作業をやっていた時のこと。グラマンが低空から機銃掃射してきました。すごく怖かったです」

その後、島で起きた悲劇は周知の通りだが、山下さんはギリギリの年齢で軍に徴用されることもなく、内地へと強制疎開することができた。硫黄島玉砕の報をラジオで聞いたのは疎開先である栃木県でのことだったという。

「聞いた瞬間、頭の中が混乱しました。学年が上の友人たちの中には軍属として島に残っている人も多くいましたから。亡くなった友人の顔をはっきりと覚えています」と山下さんは声を震わせる。

「島民たちはほとんど丸腰状態だったんですよ。何とも言えないですよ」

玉砕の報をラジオで聞いたときは 頭の中が混乱した



島に一つあった大正尋常小学校の入学式風景。



正月などに子どもたちは凧揚げに興じていた。



「島にはもちろん帰りたかったですが、島の現状を考えると諦めざるを得なかった。いまでも帰りたい気持ちは変わりません」と山下さん。



硫黄島にはいまでも戦跡が各所に残る。写真は硫黄島・西海岸の沈船群。

そんな山下さんに終戦後、島に帰りたという望郷の念は当然あったのか、訊ねたところ意外な答えが返ってきた。

「だって島には一木一草ないと報じられてきたんですよ。人が住める状態ならまだしも、こんな状態で帰ってどうするんだ、という諦めの念の方が強かったです。日々を生き抜くのに当時も必死でしたから」

ただ、故郷ゆえ「硫黄島を訪れて現状を知りたい」という思いは次第に強くなっていった。その願いが実現したのはまだ返還前の1965(昭和40)年のことだった。第1回墓参団として渡島したのだ。

「もう本当に言葉になりませんでした。昔、森があった所、石垣があった所が崩れて何も無い。平らだった所に穴ができていたりなど、以前の面影はほとんどありませんでしたから」

島に戻ったときの印象を山下さんはこう語る。その辛さや悔しさ、失望感たるや、いかほどのものだったろう。

残念ながら、硫黄島は現在も自衛隊の隊員らが駐在するのみで、年に一度の訪島事業以外、一般人の入島は原則的に許されていない。強制疎開から70年以上経つが、島民の方たちにとってはいまだ疎開中なのかもしれない。

「旧島民の人ももはや高齢になり、随分減ってきました。でも豊かだった戦前の硫黄島の記憶は決して絶やしてはいけない。次の世代に伝えることが我々の使命だと思います」

自作したというカヌーの模型を手にこう力強く語る山下さんだった。

「あの戦争が、島、そして
島民の運命すべてを変えた」

辻トメ子 (つじとめこ) さん

1931 (昭和6) 年父島生まれ。父は父島、母は八丈島出身。1944 (昭和19) 年7月の強制疎開で島を離れる。返還直後に父島へ戻り、小笠原支庁食堂の厨房を仕切った。



奥村にあるご自宅の前に立つトメ子さん。強制疎開前は欧米系など外国系島民が多く住んでいた地域で、ヤンキータウンと呼ばれていた。

小笠原の歴史を研究していた夫・辻友衛さんの書斎。小笠原関連の書籍を多数執筆している。残念ながら2011（平成23）年に世界。

いきなりの空襲警報の後、 偵察機が低空から機銃掃射



大正から昭和初期にかけて、離島ならではの不便さはあるつつも、島ならではの自然の恵みなど、物質的、精神的な豊かさを享受していた小笠原。そんな島と島民の運命を一変させたのが、1941（昭和16）年に始まった太平洋戦争である。旧島民の多くが強制疎開の憂き目にあい、その後、長らく故郷である小笠原に帰島することがかなわなかった。辻トメ子さんも祖父の代から父島に住んでいる旧島民の一人である。1931（昭和6）年生まれのとメ子さんだが、物心ついた頃にはすでに祖父は他界していた。「祖父が開拓民として父島に来たのが明治10年代。国が八丈の島民を対象に小笠原への入植希望者を募集していたそうです。入植当時は農業をやっていたのでしょ。サトウキビから糖酎を造ったり、塩を作ったりしていました。その後、島で旅館業を営むようになったと聞いています」

旭山の近くに約1万坪の土地を持っているなど、かなり裕福だったようだ。そして1889（明治22）年には、とメ子さんの父親が誕生する。「父は漁師をやっていたのですが、当時の父島は漁業も農業も盛んでした。島全体が豊かだったんですね。月に1回、芝園丸が内地から食糧を運んでくるんですが、山に行けば、ルーベル、グミ、イチゴ、バナナなどの果物が採れ、食に不自由することはありませんでした」

味噌や砂糖などの調味料も自家製。普段、肉類はあまり口にできなかったそうだが、各家庭で鶏や豚を飼っていて、慶事などがあるとその都度、つぶして周囲に振る舞っていたそうだ。「当時はクジラ漁も盛んで、保存食としてクジラの塩漬けを作ったり、とにかくいい島でした」ととメ子さんは目を細める。



とメ子さんのご家族（八丈島にて）



上／1968（昭和43）年、小笠原返還後、父島へ帰島する直前に、八丈島の飛行場にて撮影した写真。下／小笠原支庁食堂での勤務風景。

だが戦争の足音は着実に近づいてきていた。トメ子さんが小学校に上がる頃には、まだ戦争が始まっていないにもかかわらず、すでに島民の倍以上の数の兵隊が父島に駐留していたそう。子供心にその不安さはいかほどだっただろう。そして10歳で開戦を迎える。その後、戦局の悪化にともない1944（昭和19）年の春先から内地や八丈島への疎開が始まったが、当時14歳だったトメ子さんはなかなか疎開させてもらえなかった。「母や妹たちは八丈島へ疎開したのですが、父と姉と私は島に残りました。当時は軍から伝令役を命じ

ずっと帰島を望んでいた父が返還が決定した直後に他界

られていました。要塞司令部が大村にあったのですが、訓練になると自転車を飛ばし、急ぎ司令部に向かい、100mほど先から『伝令!』と叫ぶんです。ほかにも竹槍術や手旗信号などもマスターさせられました」

そんな中、トメ子さんは米軍機による父島の初空襲に遭遇する。

「いきなり空襲警報が鳴り、ひどく驚いたことを覚えています」

米軍の偵察機が雲の切れ間から父島を発見し、そのまま低空飛行で機銃掃射をしたのだ。すぐに橋の下に隠れ、事なきを得たが、その後、父島は爆撃機による本格的な空襲を数回にわたり受け、大きな被害にあうこととなる。

「水上機の格納庫があった西町あたりは焼け野原になりました」

トメ子さんがようやく島を引き揚げたのは、1944（昭和19）年7月に行われた強制疎開の折。他の島民は正規疎開船の能登丸で内地へ疎開したが、トラック島への食糧輸送の途中、攻撃を受けて足を怪我していた義兄を八丈島の病院に搬送するため、父親と一緒に小さなキャッチャーボートに乗り込み、危険を覚悟して八丈島を目指した。

「敵の潜水艦の攻撃を避けながらの航行だったため、到着に1週間かかりました。途中、潜水艦の潜望鏡が見えたときは、生きた心地がしませんでした」と振り返る。

八丈島に到着したトメ子さんは母親と合流することができたが、それも束の間、八丈島も危ないということで内地への疎開を余儀なくされる。結局、家族で長野県に逃れたものの、病気を患っていた姉の療養のために付き添い、さらに島根県の隠岐へ、母親は栃木へと疎開した。再び家族が離散する憂き目にあうのだが、当時、疎開している島民たちにとってはさほど珍しいことではなかった。

終戦後間もなく、一家は再び集まり、母親の故郷である八丈島で暮らし始めた。父島はもちろん米軍の占領下。「農業をしている母親の実家から土地を譲り受け、そこに家を建てた」というから、両親とも帰島は半ば諦めていたのかもしれない。それでも時おり父親は、島に帰りたくないと漏らしていたそう

だ。そんな父親だったが、1967（昭和42）年、ちょうど小笠原諸島返還が決まった直後に他界する。「さぞかし帰りたいかったことでしょう。生きているうちに父島を見せたかったですね」

こうトメ子さんは漏らす。

その後、夫が返還準備員6人のうちの1人として返還前にいち早く父島に渡島していたことから、トメ子さん本人も帰島を決意。小笠原支庁の食堂で調理を担当するなど、父島の復興に尽力した。「皆が知っている豊かな父島に一日も早く戻せるよう、島民が力を合わせ必死で頑張ってきました」

小笠原諸島と島民の運命を大きく変えた戦争。返還からすでに50年が経とうとしている現在、島民の方々の努力もあり、島は再び活気を取り戻したように見える。近年は世界自然遺産にも指定され、観光地としても人気だ。島には新しい血もどんどん入ってきている。戦前の小笠原と戦後の小笠原、この2つの小笠原を見てきたトメ子さんの目には果たしてどう映っているのだろうか。

「支庁食堂の調理は大変。当時、食材といえば缶詰か魚のみ。職員が栄養失調にならないよう、いかに飽きない料理を作るか苦労しました。成人式の料理を作ったり、土日もありませんでした」と返還当時は懐かしく振り返る。



「『島の名物を作りたい』という 亡き師の思いを大切にしたい」

父島・二見港のほど近く、東町は飲食店や土産物店などが軒を並べているエリアである。その一軒に一步足を踏み入ると、色とりどりの愛らしい魚たちが空中をゆらゆら……原田千津子さんが経営する「わしっこ屋」は、小笠原をはじめとする南の海に生息する魚を模した紙細工を制作・販売している土産物店だ。彼女は結婚を機に東京都内から父島へと移住してきたいわゆる「新島民」。移住したのは1980（昭和55）年だというから、かれこれ島での在住歴は38年にも及ぶ。「新聞で小笠原返還の小さな記事を読んだことが、島へ興味を持つきっかけでした。当時、地図を開いても詳しく記されていない、そんな小笠原諸島にぜひ一度行ってみたいと都庁に電話をかけた記憶があります」と原田さんは当時を懐かしく振り返る。

その後、1973（昭和48）年に父島と内地を結ぶ

定期船・父島丸が就航。一般の人々も父島へ訪れることができるようになったことを知った彼女は、夏休みを利用してさっそく父島へと向かった。「小笠原諸島といっても、まだ誰も知らない時代。ただ、当時はヒッピー文化などが流行っていたこともあり、見知らぬ土地への旅には抵抗がありませんでした」

38時間かけてようやく父島へ上陸した原田さん。サンゴが敷き詰められた道の両脇にココヤシが立ち並ぶ様子を見て「日本にもこんな場所があるんだ!」と衝撃を受けたという。「島の雰囲気が自分の感性にすごく合っていたのでしょう」

すっかり島を気に入ってしまった原田さんは、その後も休暇を利用して足繁く島へ通うようになった。そのうちに島で知り合った現在のご主人と結婚。アパート（都営住宅）で暮らし始めた。当





店の奥にある原田さんの工房。すべて原田さん自ら手作りですべて仕上げているため、同じ表情の魚は一匹もない。そんな原田さんの作品を求め、毎年来島する常連客もいるという。

原田千津子 (はらだちづこ) さん

1949 (昭和24) 年東京都生まれ。短大卒業後、幼稚園教諭を務める。その後1980 (昭和55) 年、結婚を機に父島へ移住。現在は紙細工の店「わしっこ屋」を営む。



ポップで愛らしい印象を受ける原田さんの作品に対し、師匠にあたる成瀬さんの作品は緻密でリアルなイメージを受ける。



左／過去に長期間内地の病院に入院した経験を持つ原田さん。「子どもを一学期だけ内地の学校へ転校させるなど、実家にも負担をかけた大変でした」。以降、健康管理には最大限気を使っているという。右／1973（昭和48）年頃、父島を訪れた際の写真。

島に住み続けるには「健康」が何より大事

時に限らず、同様のケースで移住を決める新島民は数多いと原田さん。実際、1973（昭和48）年以降次第に増加していった流入人口の多くは、もともと小笠原に縁のない「新島民」であった。今日では人口の8割以上を新島民が占めるといわれている。

だが、念願ともいえる島での生活とはいえ、都内とはまったく環境が異なる中で生活に戸惑いはなかったのだろうか。

「私の場合、結婚前にアルバイトで半ば島に住んでいるような状態なども経験していたので、島での生活のリズムなどはある程度わかっていたのが大きかったのでしょう。特にギャップなどは感じませんでした」

また旧島民の方々とも積極的に触れ合い、島の生活に自然に溶け込んでいったという。当時、玄関のドアに鍵をかける家庭はほとんどなかった。だから急な雨の場合など、「雨が降ってきたよ！」

と声をかけて不在だとわかったら、近所の人の方が家の中に入り洗濯物を取り込んでおいてくれる、ということが普通に行われていた。都会ではあまり見かけない光景に「最初はびっくりしたのですが、こういう助け合いの精神というか、人との触れ合いがとてもいいなあと感じました。近所のおじいちゃん、おばあちゃんには本当にお世話になりました」

結婚当初は専業主婦だった原田さんだが、子どもの保育園入園を機にパートを始めた。最初は旅館の手伝いなどを行っていたが、そのうちに転機が訪れる。夫に紹介されてアルバイトを始めた先で出会った紙細工の美しさ、見事さに心を奪われたのだ。その店が「わしっこ屋」の原点となった

「新しい小笠原名物が誕生したら面白いよね」

亜熱帯性気候を利用したサトウキビ栽培をはじめ、その後のカボチャ、ナス、インゲンなどの蔬菜栽培など、戦前盛んだった島の農業。しかし、強制疎開とその後の米軍占領のために、小笠原の農業は壊滅的な打撃を受ける。とりわけ農業が盛んだった母島への帰島がかなったのは、返還から数年後のことである。

「農地だった場所はもう荒れ放題でジャングルのような状態だった」とは、現在、母島で折田農園を経営する折田一夫さんだ。折田さんの両親はかつて母島で農業を営んでいた。両親が強制疎開後、米軍占領の影響で島に戻れない状態のなか、内地で折田さんが生まれた。

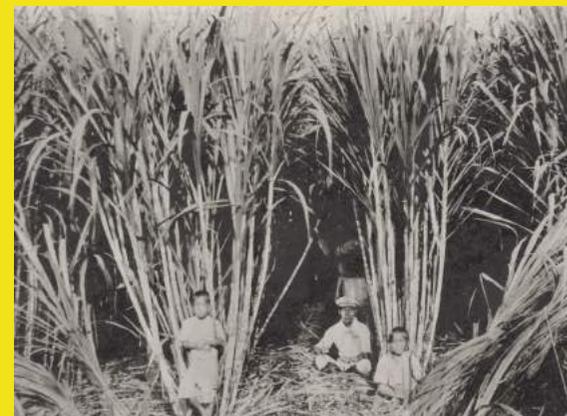
「実は当時盛んだったブラジルへの移民を希望していたのですが、小笠原返還の報を聞きつけた父と一緒に母島で農業をやらないかと持ちかけてきたんです」

だが返還当時の母島は帰島に向けた整備が始ま

ったばかりで、自給自足が必要な状態。農作業機が壊れても修理は自分で行わねばならないと考えた折田さんは、整備士の資格を取得した後、まずは父島へと渡った。小笠原返還の翌年のことである。「当時の美濃部都知事が5年で母島の住環境やインフラを整備すると宣言したんです。だから父島で自動車などの整備士をやりながら帰島できるタイミングを待っていました。修理するクルマなんてほとんど走ってなかったんですが(笑)」

その後、晴れて母島の地を踏んだ折田さんだったが、荒れ果てた土地ゆえもちろんすぐに農業ができる状態ではなく、当初は漁業で生計を立てていた。「都の農地開墾だけでは不十分なので、漁に出るかわら、自力でも開墾を行いました。ツルハシでギンネムの木を一本一本掘り返して開墾する。本当に終わるのか。気が遠くなるような作業だった」と当時の苦労を振り返る。

ようやく農地として使える状態になってからは、



上／戦前はサトウキビの栽培が盛んだった。右・左下／チョコレートメーカーの社長自ら島を訪れ、カカオの栽培を依頼したという。その想いに応えたのが折田さんだった。農園のカカオは赤い実のほか、緑色の実をつけることもあるという。その場合、熟してくると黄色へと変色する。



折田一夫 (おりたかずお) さん
1948 (昭和23) 年東京・大森生まれ。高校卒業後、父親の勤めもあり両親の故郷である母島へ。半農半漁で生計を立てつつ、農園を復活させた。

島の代表的な名産品であるパッションフルーツ。ほとんどが内地へ出荷され、父島含め小笠原諸島内に出回るのはわずか

母島は土がとんでも「深い」、だから農業に適している。



折田さんが八丈島から持ち帰ったレモンがきっかけで、いちやく島のレモンが名物に。母島では「島レモン」と呼ばれているが、正式には菊池レモンと呼ぶ。

カボチャ、キュウリ、ナスなどの野菜を中心にさまざまな作物を栽培した。中でも力を入れたのがカボチャだったそうだ。当時は内地でもまだ露地栽培が中心。内地と小笠原ではカボチャの収穫の時期がずれるため、とても重宝されたそうだ。だがカボチャの輸入緩和やハウス栽培の普及などで、ほどなくカボチャの価格が暴落する。「その次に力を入れたトウモロコシも同様。まだまだ専業で農業をやれる状況ではなかった」という折田さん。収入が安定している漁業中心の生活に再び戻った時期もあった。紆余曲折を繰り返した後、実際に専業農家として腰を落ち着けたのが数年前というから驚きだ。その一因となったのが、いまや島の代表的な特産物にまで成長したレモンだった。

「八丈島の農園で購入した3本のサイパンレモン（後に『菊池レモン』と名付けられた）を試しに植えてみたら、どんどん実がなる。『これはいける』と考え、レモン栽培に力を入れ始めたんです」

もちろんすべてが順風満帆だったわけではない。台風による塩害やサビダニの駆除に頭を悩まされたり、他の品種を試して失敗したり、さまざまな壁にぶつかったそうだ。

それでも現在は500本ものレモンの木が農園内に育ち、たわわに実をつけている。

いまではレモンに加え、パッションフルーツやマンゴーなどフルーツを中心に栽培している折田農園だが、近年はさらに新しい試みに挑戦している。それがカカオの栽培だ。内地のチョコレート

メーカーから打診されたのをきっかけに6年ほど前からスタートした。

「緯度にして南北20度線がカカオベルトといわれているように、本来カカオは赤道付近での栽培に適した作物。こんな高緯度で栽培するのは世界で初めてじゃないですか」と笑う。栽培にあたっては本場である東南アジアへ自ら赴き、カカオ栽培のノウハウを学んできた。いまでは5棟のハウスに500本強を栽培するまでに至っている。

「まだまだわからないことも多いのですが、実が出来始めてから半年ほどが収穫のタイミング。きれいな赤色がだんだんくすんできてるんです」と木になったカカオの実を手に取りながら説明する折田さん。その表情は実に楽しげだ。近い将来『小笠原

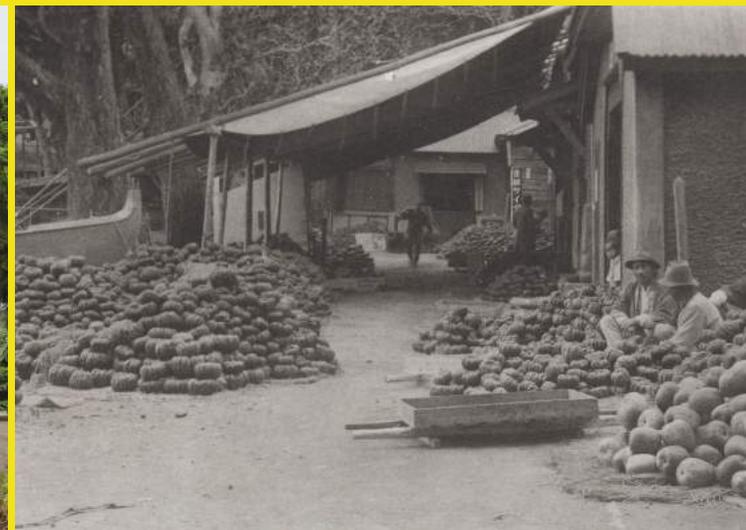
チョコレート』なる名物が誕生することになると考えると、折田さんの表情もうなずける。

「うちの先祖は明治初期に母島へ渡り、この土に惚れ込み移住した。高い山が多い母島は、高温多湿で土壌がとても豊か。だから農業に適しているんです。中でもうちの農園は盆地状の場所にあり、昼夜の寒暖差が大きい。だからフルーツはみな糖度がのっておいしいですよ」

現在、母島での専業農家は10軒ほど。戦前から農業を続けているのは2軒で、あとは戦後に移住し農業を始めた新島民たちだ。最近では若い農業従事者も増えているという。折田さんのさまざまな取り組みはもちろん、これら新しい血が、これからの島の農業を活性化させるのが楽しみである。



右／広大な敷地内にハウスがずらりと立ち並ぶ。
左／戦前の蔬菜の荷造り風景。カボチャなどの冬野菜が多く収穫できていた。

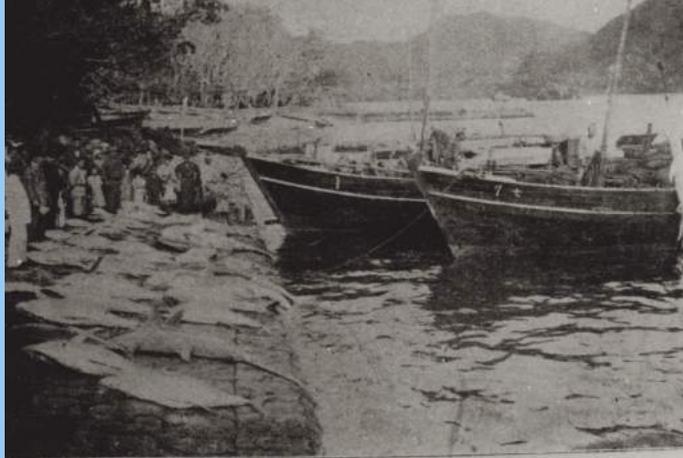


「島外に後継者を求めた英断が
現在の島の漁業の礎になっています」

第八興勇丸



左／戦前のマグロの水揚げ風景。右／内地では高級魚として重宝されるオナガダイ。近年は漁獲量も減ってきているという。



返還当時、先輩たちの苦労は並大抵ではなかった

亜熱帯の気候に属し、周囲を海に囲まれた小笠原諸島。強制疎開前、漁業は農業に次ぐ主要産業のひとつだった。戦前の最盛期であった昭和初期には父島・母島・硫黄島を合わせて300人以上の島民が漁業に従事、180隻前後の漁船が稼働していたという。当時はカツオ、マグロ、カジキ、サワラなどの回遊魚や、ムロアジ、タイ、トビウオなどの根付きの魚を対象とした漁のほか、捕鯨も盛んに行われていた。島の周囲は豊かな漁場に恵まれ、まさに魚の宝庫だった。しかし小笠原の漁業は、強制疎開とその後の米軍占領のために大きな打撃を被った。早期に父島への帰島を許された欧米系の人びとが米軍占領下で漁業を再開していたが、島に帰れず内地にとどめ置かれた島民の多くが、別の仕事で生計を立てるようになっていた。「戦前に漁業をしていた旧島民の方々が、返還直後に再開しようと父島に戻ってきたのですが、そ

れはひどい有様だったそうです」とは、現在、島で漁師を行っている磯部康朗さんだ。

帰島した元漁業従事者たちが最初に行ったのは、ジャングル状態だった荒地を開墾し、そこに建物を造ることだった。そこで共同生活をしつつ、1968（昭和43）年の10月に漁業協同組合を再建する。だが後継者不足もあり、当時から慢性的に人材不足に悩まされていた。そこで、漁協の再建メンバーの一人として父島に移住していた硫黄島旧島民の菊池滋夫さんが、人材を島の外に求めるべく、精力的に活動を行ったのだ。「発想力と行動力があり、常に先を見ているような人でしたね」。こう語る磯部さんは、菊池さんらが打ち出した募集広告をきっかけに島で漁業を始めたいわゆる新島民。

神奈川県座間市出身の磯部さんは、高校卒業後、地元で親戚が営む文具の卸会社に就職していた。

磯部康朗（いそべやすろう）さん

1958（昭和33）年神奈川県座間市生まれ。高校卒業後、地元企業に就職。25歳の時に漁師見習いとして父島へ移住。現在は自らの漁船でメカジキやメバチマグロの漁をはじめ、アカバ、オナガなどの底釣り漁も行う。

ある日夕刊の社会面にある小さなコラムに目が止まったという。

「漁業従事者の募集だったんです」

小笠原にはダイビングで一度訪れたことがあり、すごくよい海だなという印象を持っていたようだ。しかし漁業の経験は皆無。でも自分のやりたいことをやろうと決意して、面接へ臨んだ。そこで出会ったのが、当時、組合長だった菊池さんというわけだ。話はトントン拍子でまとまり、1983（昭和58）年、25歳の時にまずは乗り子として漁師見習いを始めるようになった。

「最初は大変でしたね。朝早いのはもちろん、小さい船だから海上ではとにかく揺れるんです。その中で作業をしたり、食事を作らなければならない。一事が万事経験したことがない仕事でしたから」

多くの人が音を上げて乗り子を辞めていくような厳しい環境の中、磯部さんは意地で仕事を続けた。その期間、約9年。その後、菊池さんの漁船を預かり、独り立ちをするのだが、いろいろな方に漁の仕方を教わったという。

現在は自分の漁船を持ち、一人で操業している磯部さん。父島近海はもちろんだが、硫黄島の南の海域まで遠出することもある。漁師を始めてから35年ほどの間に対象魚も大きく変わった。

「若い頃はオナガ（ハマダイ）やアカバ（アカハタ）を狙っていたんですが、近年は特にオナガが獲れなくなったので、メカジキやメバチマグロも獲るようになりました」

沖縄から導入したソデイカ漁の仕掛けを改良し



母島・沖港での水揚げ風景。以前は父島と同じ漁協だったが、現在は母島漁協として独立している。



「漁師同士にありがちな、閉鎖的な部分が少ないところが父島の漁業の強み」だと磯部さん。



釣り上げた本マグロ。メバチやキハダのほか、数は少ないが本マグロが釣れることもある。



母島の漁港は、沖港の定期船乗り場の東側。

て試したところ、釣れるようになったそうで、特にメカジキは魚価が高いこともあり、いまでは大部分の漁師が、これらを狙っているそうだ。

「メカジキは内地周辺では獲れる場所が限られているので珍重されるんです」と言う。

獲れた魚は基本的には内地に出荷する。メカジキの場合、築地にはほとんど出さず竹芝からさらに陸送して、より高い値が付く気仙沼へ出荷することもあるという。その場合に気になってくるのが鮮度だが、ただでさえ立地的に不利な小笠原。その日の朝に揚がった魚を午後発のおがさわら丸に乗せたとしても、竹芝に到着するのは翌日夕方。さらに気仙沼への陸送となると到着するのが夜に

なってしまう。

「メカジキにかかわらず、いかに鮮度を保ちながら内地へ魚を送るかは、常に頭を悩ませている部分」だと磯部さん。離島ならではの課題である。

ただ、昨今は冷蔵技術が発達したうえに、釣った魚を即解体し氷水につけて保冷するなど、漁師たちと漁協職員の徹底した努力もあって、内地の市場関係者からの評判は上々だという。

二見湾の東岸に広がる父島の漁港。父島の漁協に所属している漁船は現在三十数隻ほどだ。

いまでは実際に漁に出ている漁師のほとんどが新島民だという。磯部さんが漁師見習いとして島に来て約35年、その間も島外の人間に積極的に門戸を開いてきた賜物である。

「常に新しい血が入ってきているから、閉鎖的ではないんです。代々続いている漁師たちばかりだとはいきませんよね」

普通、自分が使っている仕掛けは他人には教えないものだが、荒天で漁に出られない日などは、皆で道具のメンテナンスをしつつ仕掛けについてアドバイスし合う。父島の漁師たちは開放的だけど結束力も強いのだと胸を張る。

そんな磯部さんも現在60歳。そろそろベテランと呼ばれる年齢に差し掛かってきた。

「若い人間は皆、研究熱心で次々に新しいアイデアを考え実践する。うかうかしていると置いてけぼりにされちゃいます」

こう語りつつも、嬉しそうな磯部さんの表情が実に印象的だった。

いかに鮮度を維持して内地へ魚を運ぶかは永遠の課題



捕獲したザトウクジラ。戦前はクジラ漁も盛んだった。

「島が追い風の時期にある現在が、大いなる飛躍のチャンス」

現在でこそ「世界自然遺産の島」として一般的な認知度も高まり、多くの観光客が足を運ぶ小笠原諸島。だが、世界自然遺産に登録される以前は、ダイビングや釣りなどの趣味を持つ一部の人にしか注目されていない、まさに「知る人ぞ知る」島だった。若い頃からスキューバダイビングが趣味だったという森田康弘さんもそんな一人である。「沖縄や海外には潜りに行ったことがあったけど、当時は旅行雑誌などでも小笠原の情報はほとんどなかったですね。まして小笠原へのツアーなんて皆無だった」という。

それでもダイビング雑誌の情報や、手伝っていたダイビングショップの店長の話などから、小笠原の海に興味を持った森田さんは1986（昭和61）年、23歳の頃に一念発起し、父島への移住を決断する。「まずは自分の目で確かめたくて、ダイビングショ

ップでガイドとして働くことにしました。小笠原の海がどんな海か見たくて、気軽に考えていました。若かったんですね」と当時を振り返る。

結果、伊豆諸島はもちろん、沖縄とも違うダイナミックな海に魅了され、内地に戻ることなく、父島でダイビングのガイドを続け、現在に至った。まさに小笠原の観光業を黎明期から現在まで見てきたといっても過言ではない森田さん。2016（平成28）年からは、ガイド業の傍ら小笠原村観光協会（父島）の会長も務めている。その森田さん曰く、小笠原の観光業にはいくつか転機があったという。

「以前から釣り好きの間では、小笠原は大物釣りの聖地として有名でした。彼らは『おがさわら丸』が港に到着すると、そのまま用意された漁船に乗り換えて髯島列島付近のポイントへ向かうんです。そのまま磯の上に TENT を張って昼夜釣り三昧。そしておがさわら丸の出港日の午前中に戻ってき





上／ダイビングのインストラクターを務める森田さん。下／ホエールウォッチングを楽しむ観光客。

森田康弘 (もりたやすひろ) さん

1963 (昭和38) 年東京都日野市生まれ。高校卒業後、都内の自動車ディーラーに勤務。1986 (昭和61) 年、23歳の時に父島へ移住。スキューバダイビングのガイドを務める。2016 (平成28) 年に小笠原村観光協会の会長に就任。



父島観光協会のエントランスには、島のパンフレットやポスターが壁一面に貼られている。



観光協会のホームページのリニューアルを考えている森田さん。現役のガイドとしてダイビングショップを営んでおり、後進の育成にも力を入れている。

世界自然遺産登録が島の観光業の大きな転機に

て、午後に内地へ帰ってゆく」

島内に宿を取ることもないばかりか、下手をすると一度も島に上陸しないまま帰るのではないかなと言わんばかりである。そのような中で、観光業が発達するきっかけとなったのが、商業捕鯨の終了だった。

「代わりにホエールウォッチングやドルフィンウォッチングに白羽の矢が立ったのです」

ザトウクジラが小笠原近海に南下してくるシー

ズンが、ちょうど小笠原への観光客が激減する冬場であることも後押しとなった。新たな観光資源の育成が急務だった父島では、商工会が中心となってこのプロジェクトを推し進める。森田さんもこれらのノウハウを学ぶ機会にめぐまれ、ハワイやカリフォルニアのホエールウォッチング先進地の学者やガイドたちの来島や調査に同行したり、小笠原のホエールウォッチングを内地へ広めるために大掛かりな広告を打ったりと駆け回ったそう

だ。結果、じわじわと小笠原でのホエールウォッチングの認知度が高まり、集客も次第に伸びてきた。

そんな島の観光業に最大の転機が訪れる。言わずと知れた2011（平成23）年のユネスコ世界自然遺産登録だ。ネルシャツにトレッキングシューズといった出で立ちの、これまでとはまったく異なる客層の人々が、おがさわら丸から大挙して降りてくる光景を目の当たりにして、森田さんはあることを再認識させられたようだ。

「それまで小笠原の観光資源は海が中心だと思っていたわけです。それが山や森にも観光資源があることを改めて実感しました」



左／陸上のエコツアー風景。上／陸域ガイドの講習会は今も盛んに行われている。

事前に山のガイドなど育成を進め、万全な体制とまではいえませんが、ある程度、準備をして望んだ。しかし、次から次へと島を訪れる観光客の数は森田さんらの想像をはるかに超えた。それにともない、これまでにはなかった新たな課題や問題点が噴出した。

「トイレひとつとってもそうなのですが、とにかく設備が追いついていかないんです。また山に人間が入るとどうしても自然が汚れてしまう。せっかく美しい自然を楽しみにきたのに興ざめた、といった不満も耳にしました」

島を訪れるためのほぼ唯一の交通手段であるおがさわら丸にも不満が起こった。

「船旅と聞いて、豪華なクルーズだと思い込んで乗船された方々もあり、生活路線を運航するおがさわら丸は貨客船であると説明してもなかなかわかっていただけなくて」

島の観光業が新たなステージに入った故の諸問題だといえるが、それらも徐々にではあるが、解決されつつあるという。ただ観光地としてさらなる成長を図るにはまだまだ課題が多いと森田さんは語気を強める。観光業に携わる島民の意識の問題。いわゆる「おもてなし」だ。世界自然遺産登録からすでに7年。世界遺産ブームで観光客が訪れてくれる時期はそろそろ過ぎようとしているかもしれない。

「例えば観光協会のホームページひとつとっても、ただ情報が均一的に羅列してあるだけで、観光客が本当に欲しい情報にたどり着けないと思います。パンフレットも同様。何を基準に宿や飲食店を選べばいいかわかりにくい」

世界自然遺産登録に始まり、新おがさわら丸の就航、そして返還50周年と小笠原にとってまさに追い風が吹いた7年間。島内の観光業を見直し、さらなる成長を図るにはいまのうちしかない。こう考えている森田さん。ホームページのリニューアルや各種観光用設備の最適化、同業者間のレベルの底上げなど、やることはたくさんある、と笑顔で語った。

「船が港に到着すると
島がにわかには活気づくんです」

高橋 勇 (たかはしいさむ) さん
1966 (昭和41) 年東京都目黒区生まれ。船員育成の学校を卒業後、小笠原海運へ入社。1987 (昭和62) 年に初代おがさわら丸に乗船。2010 (平成22) 年に船長に就任する。



台風による欠航が続けば それだけ島の物資が乏しくなる



現在は4航海乗船し、2航海分休みを取るという高橋船長。散策が好きで、島での休日の折には母島まで行くこともあるという。

内地から遠く離れた小笠原諸島。戦前から主たる交通手段として機能してきたのが海路である。大正から昭和初期にかけて活躍した「芝園丸」

は、定期船として東京～小笠原～硫黄島を約8日間かけて運航してきた。

返還後に小笠原への定期航路が復活したのが1972（昭和47）年のことだ。翌年には「父島丸」が就航。当時は東京と小笠原を約38時間かけて運航した。それでも、戦前にくらべると格段の進歩である。そして現在は3代目「おがさわら丸」が約24時間で運航中。この定期航路は内地と小笠原とを結ぶライフラインとして不可欠な存在であり続けた。「この船は貨客船。乗客はもちろんですが、生活物資などの貨物を運ぶため、なるべく運行ダイヤどおりに安全に定時入港することを心がけています」

こう語るのは、1987（昭和62）年にクルーとして初代「おがさわら丸」に乗船して以来、30年以上もの間、この海路を見つめ続けてきた船長の高橋勇さんだ。

ベテランの域に達する高橋船長が最もケアするのが、竹芝を出港して東京湾を出るまでの操船。挟水路のうえ、交通量も多いため、気が抜けないのだという。それでも30年の間、さしたるトラブルもなく、無事に運航を続けてきた。とはいえイレギュラーが起ることも。

「八丈島沖を航行中に急患が出たため、三宅島沖まで引き返して保安庁のヘリコプターで患者を緊急

搬送したこともありました」

最も多いのが台風による影響だ。毎年7月～10月の台風シーズンには欠航することも珍しくない。「生鮮食品や郵便物なども運んでいるため、欠航が続くと島の物資が乏しくなってしまう。ですから乗客はほとんどいない状態で貨物だけを運んだこともありました」

そんな高橋船長に仕事をしていて手応えを感じる瞬間について訊ねた。

「平穏無事に航海が終わったときでしょうか。おがさわら丸が入港して人や荷物が到着すると、島に活気が漲るんです」

空港建設の話がにわかに動き出した感のある昨今だが、これについても高橋さんの回答は誠実だ。「我々船員としては（実現したら）少し寂しい部分はあるのですが（笑）、島の人々にとっては切実な願いなのかもしれません。急患などが出た場合を考えても空路が圧倒的に便利です」

その言葉の端々からは、単に人と荷物を運んでいるのではなく、人々の“生活”や“思い”そのものを運んでいるのだ、という確固たる誇りのようなものが感じられた。



2016（平成28）年に就航した3代目「おがさわら丸」。父島と母島とを結ぶ「ははじま丸」も2016年に代替わりした。

CASE 10 : 医療事情や健康について聞く

小笠原村母島診療所

佐藤洋美(さとうひろみ)さん

1946(昭和21)年熊本県生まれ。都立府中病院(現・都立多摩総合医療センター)で勤務後、1972(昭和47)年、27歳の時に看護師として母島診療所に赴任。1984(昭和59)年まで母島で看護師を務めた後、小笠原支庁・母島出張所へ。現在も母島在住。

「内地へ行かずとも治療ができる 医療体制の拡充は島民全員の悲願」

島に住み続ける人々にとって、最大の関心事のひとつである医療環境。現在でこそ父島、母島の診療所とも、CTなどの検査機器や多少の入院設備などが整備されているが、あくまでも暫定的なもので、手術など本格的な治療になると、内地の病院に入院しなければならない。一方、母島で入院が必要になった場合は、まずは父島の診療所へ向かう。母島の診療所には入院設備がないからである。そんな母島の診療所を、島民らの本格的な帰島が始まる以前から支えてきたのが、元看護師である佐藤洋美さんだ。

「看護師として母島に赴任したのは1972（昭和47）年のことでした。ちょうど旧島民の皆さんが帰島できるよう、道路の整備や都営住宅、学校などの施設づくりが急ピッチで進められていた時期でした」

診療所にはドクターと佐藤さんの2人だけだったが、赴任当時、島に常駐している人々は、建設会社の作業員や農地の復旧にあたる農民など、健康で働き盛りの成人男性が中心だったので、

さほど混乱もなかったという。

「ところが翌年8月に都営住宅が完成し、島民の本格的な帰島が始まってからは、患者が急増。それこそ土日もないくらい忙しかった」

診療所は、診察室と簡易的な治療室のみで、ちょっとした風邪や腹痛、軽いけがの治療などを想定していた。だが現場では実際そうはいかない。出産や重症患者の診療など、どんな病気にも対応せねばならなかった。時には嵐の中、漁船で4時間かけて母島で対応しきれない患者を父島まで搬送したこともあったという。

「とにかく必死でしたね」と当時を振り返る佐藤さん。1984（昭和59）年3月までの約12年間、母島の人々の看護を担い続けた。

現在、母島診療所の看護師は3人体制。1994年（平成6）年には新しい診療所も完成し、医療機器も充実した。だが、入院が必要だったり、重篤な症状だったりする場合に父島や内地の病院へ行かねばならないのは、以前と変わらない。

「総合病院は難しくとも、内地の病院へ行かず



上／父島の診療所にはCTなどの最新機器も充実。下／旧診療所の前でドクターらと記念撮影する佐藤さん。

に済むよう、入院施設や治療施設はもちろん、ドクターや看護師の体制などを早く作ってほしい。あとは、島で安心して最期を迎えられる施設ですね」

こうした佐藤さんの言葉は、そのまま島民全員の願いでもある。

「自然に手を加える場合は
その影響を総合的に
考えることが肝心」

安井隆弥 (やすいたかや) さん
1931 (昭和6) 年台湾生まれ。
東京農工大学卒業後、高等学校
の教員として1955 (昭和30)
年に八丈高校へ赴任。その後、
1978 (昭和53) 年に小笠原高
校へ。1995 (平成7) 年に小笠
原野生生物研究会を設立。





2017（平成29）年5月にオープンした世界遺産センター。世界遺産の価値や保全の取り組みに関する展示をはじめ、小笠原の自然に関するさまざまな情報が得られる。

1972（昭和47）年に国立公園に指定、さらに2011（平成23）年には世界自然遺産への登録を果たした小笠原にとって、環境問題や自然保護はもはや永遠のテーマといっても過言ではない。返還直後は自然保護よりも復興事業を優先する

風潮が確かにあったそうだが、現在では環境問題に対する島の人々の意識は確実に高まってきたように見える。

ところがNPO法人・小笠原野生生物研究会（野生研）の元理事長である安井隆弥さんは「保護のやり方そのものにまだ疑問がある」と警鐘を鳴らす。安井さんは、返還10周年でもある1978（昭和53）年に生物の教諭として小笠原高校に赴任。65歳まで同校で教鞭を執った後、自然環境の保全を目的に野生生物の保全や調査を行う任意団体・野生研を創設した。

「野生研を立ち上げた当時は、支庁にまだ開発課があった時代。村も開発に重きを置いていました。でも、もう少し自然のことを考えながら開発を進められるのではと考えたのです」

以来、希少な植物の保護増殖や、属島における自然再生事業、父島での海岸林育成や固有植物の植栽など、さまざまな活動を行いつつ、環境問題に正面から向き合っている。

「世界自然遺産登録前後から国や都もようやく自然保護に本腰を入れ始めた。そういう意味では世界自然遺産登録のメリットもあります」

安井さんはこう評価したうえで、他方で問題点も多くなったと危惧する。たとえば、山に人が多く入るようになったため、山道に雑草が増えており、これが生態系の破壊につながると述べる。また、活性化してきた各種自然保護事業についても、十分な効果が得られていないものが少なくないという。

「対象の生物を保護・保全することしか考えていない場合が多い。例えばネズミの害から希少種を護るために金網で囲うとします。金網の隙間から虫が入れないから受粉せず種子ができないんです。人が自然に手を加える際は、その影響をもっと総合的に見ないとダメです」

安井さんが中心となって活動してきた事業の一つに西島での植生回復事業がある。ネズミによる害を防ぐために、ネズミが食べないタマナの種をまき、現在は植生の回復を待っているところだ。「タマナの森ができると鳥が来る。鳥の糞を通して周りの森の種子が持ちこまれ、多様な種類の木々が成長する。すると昆虫も増えます。ちゃんとした森に回復するまで50年はかかるのです」

アカギやグリーンアノールなどの「外来種」問題を筆頭に、課題が山積しているように見える環境問題。

「どれも気の長い作業に感じるかもしれませんが、自然への影響を総合的に考えながら、慎重かつ着実に保護活動を行っていく。それしか方法はありません」

今年87歳になる安井さん。だがその瞳は小笠原の自然を絶対に守るという使命感にあふれている。

世界自然遺産登録には「いい面」「悪い面」の両方ある

植物好きが高じて生物の教師になったという安井さん。下ノフィールドワークを行う安井さん。



「いつの日か島民全員で
南洋踊りを踊りたい」





左上／長年かけて小高さんが集めた資料の一部。右上／返還直後に南洋踊りを披露する人々。

潰えそうになった島の踊りを 返還後に継承し復活させた

19世紀の初頭まで定住者がいなかったことや、戦時強制疎開（硫黄島の場合は地上戦の場にもなった）によって生活文化が断ち切られたことも影響して、島の伝統的な文化とみなせる要素はあまり多くないといえるかもしれない。とはいえ、島民の多様なルーツを反映して、各地の文化の影響も受けながら、小笠原に定着してきた文化も存在している。たとえば、カヌー、タコノ葉細工、小笠原太鼓、島寿司、そして南洋踊りなどが、それにあたるだろう。南洋踊りは、強制疎開前から現在まで小笠原で受け継がれてきた文化だが、その起源は意外に新しく、また他地域の影響を受けたものである。

「小笠原愛作さんの父であるジョサイア・ゴンザレスさんが、戦前にパラオなどカロリン諸島の島々の踊りを小笠原に伝えたのが起源だといわれています」と述べるのは、現在、南洋踊り保存会の副会長を務める小高常義さんだ。小高さんは山梨県

富士吉田市出身。富士山の袂で幼少からさまざまな伝統文化に触れてきたこともあり、母島への移住をきっかけに小笠原の文化を研究するようになった。そこで出会った南洋踊りに魅了されたのだそう。小高さんは南洋踊りのルーツを求めて、カロリン諸島などミクロネシアの島々を歴訪したこともある。

「戦前は酒の席などでの座興として島民に踊られていたようです。軍の慰問などで披露されることもありました」

その後、強制疎開や米軍占領で島民の多くが島に帰れない時期が続いたが、その間も南洋踊りは途絶えることなく、島民の疎開先・居住先で踊られ続けていた。

「返還後、そんな南洋踊りを復活させようと尽力したのが、南洋踊り保存会の初代会長である浅沼正之さんや2代目会長の高崎喜久雄さんでした」

そんな先輩たちの保存活動の甲斐もあり、2000（平成12）年には東京都の無形民俗文化財に指定。現在も保存会では、小学校で踊りの指導を行ったり、運動会の際に全員で踊ったり、島を訪れた団体観光客向けに踊りの披露や体験指導を行ったりとさまざまに活動をし、普及に努めている。「いつか島民全員で南洋踊りを踊るのが夢」

こう屈託なく笑う小高さんだった。

おがさわら丸出航の際に、二見港で披露される小笠原太鼓、そして南洋踊り。人々の心に響くこれらの魅力的な文化は、これからも小笠原で受け継がれていくに違いない。

小高常義（こだかつねよし）さん

1936（昭和11）年山梨県富士吉田市生まれ。母島出身の夫人と結婚した後、1974（昭和49）年に母島へ移住、母島発電所の所長などを歴任。現在は南洋踊り保存会の副会長として、南洋踊りの研究および普及に尽力する。